

共同研究プロジェクト紹介 述語構造の意味範疇の普遍性と多様性 述語構造の意味範疇の普遍性と多様性

著者	パルデシ プラシャント
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
号	7
ページ	23-29
発行年	2012-02
URL	http://doi.org/10.15084/00000691

〈共同研究プロジェクト紹介〉
述語構造の意味範疇の普遍性と多様性

述語構造の意味範疇の普遍性と多様性

Universals and Cross-Linguistic Variations in the Semantic Structure of Predicates

プラシャント・パルデシ (Prashant PARDESHI)

国立国語研究所 言語対照研究系 教授

(Professor, Department of Crosslinguistic Studies, NINJAL)

【要旨】 述語構造の意味範疇に関わる重要な言語現象の一つに「他動性」がある。本プロジェクトは意味的他動性が (i) 出来事の認識, (ii) その言語表現および (iii) 言語習得 (日本語学習者による日本語の自動詞と他動詞の習得) にどのように反映されているのかを解明することを目標とする。日本語とアジアの諸言語を含む世界の約 40 言語を詳細に比較・検討し、それを通して、日本語などの個別言語の様相の解明だけでなく、言語の多様性と普遍性についての研究に貢献することを目指す。

Abstract: ‘Transitivity’ is one of the most important linguistic phenomena related to the semantico-syntactic structure of predicates. The main goal of this project is to shed light on how semantic transitivity is reflected in (i) the construal of an event, (ii) the linguistic encoding of an event, and (iii) the acquisition of transitive and intransitive verbs by Japanese as a foreign language (JFL) learners. Through detailed investigations of about 40 languages around the globe, including Japanese, and crosslinguistic comparisons among these languages, we aim to make a contribution to deepening our understanding of individual languages and of the unity and diversity underlying human languages.

1. 本プロジェクトの研究テーマ：「他動性 (transitivity)」

本プロジェクトの研究テーマは述語構造の意味範疇に関わる重要な言語現象の一つである「他動性」である。角田 (1991: 63) は「他動性とは自動詞文・自動詞節との関係も含めて、他動詞文・他動詞節に関する言語現象一般を指す」としている。伝統的な文法理論においては、単一の基準に基づいて動詞が二分されていた。すなわち、目的語を有し、受動文が作れるのが他動詞で、そうでないものが自動詞である。このような古典的なカテゴリー観では、必要で十分な共通性、あるいは定義的特性を備えていることを前提にカテゴリー化が行われる。そのため、カテゴリーの境界は明快であり、カテゴリーのすべての成員が同じ程度に一樣にそのカテゴリーに帰属すると考えられていた。しかし、同じ他動詞でも own は受動文が作れるのに対し、意味的に類似している have は受動文が作れないといった例をはじめ、様々な問題があり、この考え方には不都合な点も多い。

Wittgenstein (1953) は古典的なカテゴリー化に反論し、家族的類似性という概念を提示した。Wittgenstein を皮切りに、70 年代より、認知心理学の分野においてカテゴリー化についての新しい捉え方がなされてきた。特に Rosch (1973) のプロトタイプ理論の提示によって、

カテゴリーのすべての成員が同じ程度に一樣にそのカテゴリーに帰属するのではなく、カテゴリーの成員間にはばらつきがあることや、あるカテゴリーとそれに隣接する他のカテゴリーの境界がファジー（曖昧）であることが明らかにされた（詳細は Lakoff (1987), 2 章を参照）。この認知心理学の知見を言語学に取り入れ、他動性に関する研究をすすめたのが Lakoff (1977) や Hopper and Thompson (1980) である。これらの研究は他動性のプロトタイプを特徴付けたパイオニア的なものであり、後の他動性に関する研究に絶大な影響を与え続けている。Hopper and Thompson (1980) が提案する他動性のプロトタイプの特徴付けについては様々な和訳があるが、ここでは角田 (2007: 4) を採用する。

表1 Hopper and Thompson (1980) の他動性のプロトタイプ

	高い	低い
A. Participants (参加者)	2人以上：動作主と対象	1人
B. Kinesis (動作様態, 動き)	動作	非動作
C. Aspect (アスペクト)	動作限界あり	動作限界なし
D. Punctuality (瞬間性)	瞬間	非瞬間
E. Volitionality (意図性, 意志性)	意図的	非意図的
F. Affirmation (肯定)	肯定	否定
G. Mode (現実性)	現実	非現実
H. Agency (動作能力, 動作主性)	高い	低い
I. Affectedness of O (被動作性, 影響性, 受影性, 対象への影響, 動作が対象に及ぶ度合い)	全体的に影響	部分的に影響
J. Individuation of O (対象の個別化, 対象の個体化, 個性性)	高い	低い

Lakoff (1977), Hopper and Thompson (1980) の研究以来、動詞を他動詞と自動詞に二分する古典的なカテゴリー化の考え方が見直された。他動詞と自動詞は連続体をなし、他動性は度合い・程度の問題であり、その高低によって、他動性の連続体上に様々な節 (clause) が並べられるという理解が主流となってきた。本プロジェクトでは Lakoff (1977), Hopper and Thompson (1980), Jacobsen (1992) に倣って他動性を連続体として捉えている。

他動性のプロトタイプ理論では、典型的な状況（例えば、典型的な動作主・被動者を含む状況）とそれを言語化する表現形式との対応関係のみを扱う傾向がある。しかしながら実際には、他動性の高い出来事を描写するために使用される典型的な言語形式が、他動性が高いとはいえ状況の描写にも拡張して用いられることが、様々な言語で観察される。例えば、日本語では「～が～を」という格枠組みは「太郎が花子を殺した」のような典型的な出来事のみならず、主語（動作主）の意図性が欠けた「太郎が財布をなくした」、「太郎が首を寝違えた」のようないわゆる非典型的な出来事の描写にも拡張して使用される。典型的な状況および、そこから様々な点において逸脱した出来事の連続体の一部を以下の表2にまとめる。

表2 他動性の連続体

主語の意味役割		例
当該事象の 意図・計画者	当該事象の 実行者	
○	○	太郎が次郎を殺した。
×	○	太郎が指を切ってしまった。
×	○	嵐が木々をなぎ倒し、がけ崩れを引き起こした。
○	×	太郎が故郷に家を建てた。
×	×	太郎にお金が必要だ。
×	×	我が家の隣に最近新しいマンションが建った。
○	○	太郎が駅まで歩いた。
×	×	太郎が死んだ。
×	○/×??	太郎が尿意をもよおした（南アジア諸語では「太郎に尿意が当たった」のように与格主語自動詞構文で描写される）。

このように、ある言語の典型的な表現形式の拡張的な使用の背後にどのような認知的なメカニズムが潜んでいるのか、また拡張において言語間にどのような共通点や相違点が見られるのかを追及することによって、他動性の連続体の内容がより鮮明に見えてくるとと思われる。このようなアプローチにより六つの言語を対象として行った研究が、西光・バルデシ編(2010)である。本プロジェクトは西光・バルデシ編(2010)を拡張・発展させるものと位置付けられる。

2. プロジェクトの研究目標および方法論

本プロジェクトは Lakoff (1977), Hopper and Thompson (1980), Jacobsen (1992) などて提唱された意味的他動性が (i) 出来事の認識, (ii) その言語表現および (iii) 言語習得 (日本語学習者による日本語の自動詞と他動詞の習得) にどのように反映されているのかを解明することを目標とする。日本語を含む世界の約 40 言語を詳細に比較・検討し、それを通して、日本語などの個別言語の様相の解明だけでなく、言語の多様性と普遍性についての研究に貢献することを目指している。地域的な分布の観点から見ると、本研究の対象となる言語はアジア、ヨーロッパ、オーストラリア、アフリカの 4 大陸に分布する。

上述の目標の達成を目指し、本プロジェクトでは (A) 言語類型論チーム、(B) 心理言語学チーム、(C) 言語習得チームの三つのチームを設け、年に数回公開研究会を行い、共同研究を進める。それぞれのチームの研究手法や目標は以下の通りである。

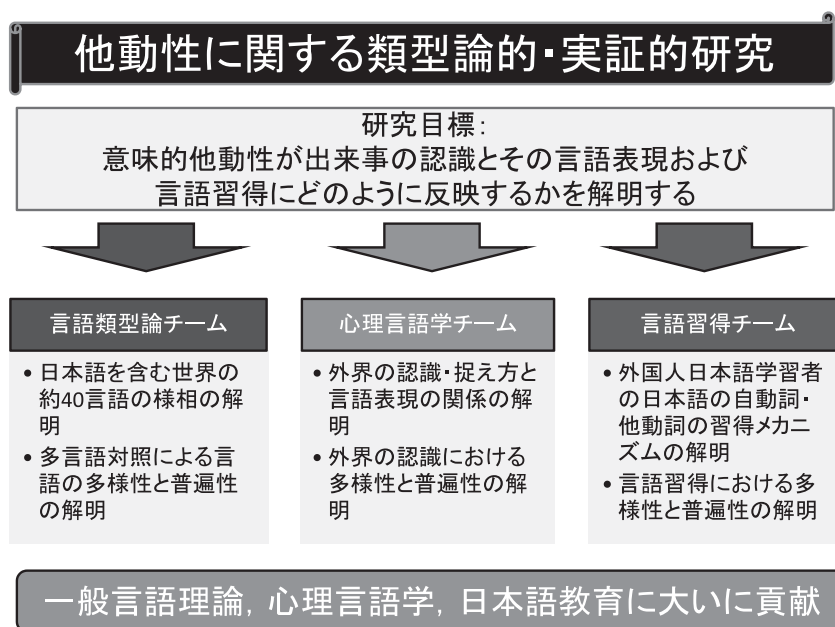
(A) 言語類型論チームは個別言語における語彙構造の記述 (自動詞と他動詞の形態的な関係に基づいたリストの作成) から出発し、他動詞・自動詞で表現される典型的な出来事、または他動詞・自動詞で表現される典型的な出来事から逸脱した様々な出来事の形態・統語的な特徴を詳細に記述し、一次的なデータに基づいて他動性の連続体の全体像を浮き彫りにする。さらに、これらの詳細な記述により言語間の対照研究を行い、日本語などの個別言語

の様相の解明だけでなく、言語の多様性と普遍性についての研究に貢献することを目指す。2011年11月現在、44名の研究者がこのチームの共同研究に携わっている。

(B) 心理言語学チームは非言語的な刺激（ビデオクリップ、質問紙）を利用して様々な言語の話者から言語表現を引き出し、それによって浮かび上がる言語間の類似点や相違点を通して、外界の認知・捉え方と言語使用の関係の解明を目指す。このチームはスタンフォード大学の研究者らとの共同研究も模索している。2011年11月現在、6名の研究者がこのチームの共同研究に携わっている。

(C) 言語習得チームは類型論的に異なった特徴を持つ言語を母語とする日本語学習者の日本語の他動詞・自動詞の習得を通じて、その習得過程における言語間の類似性と個性の解明を目指す。2011年11月現在、4名の研究者がこのチームの共同研究に携わっている。

上述のプロジェクトの全体像を以下に図示する。



3. 研究成果：期待および実績

本プロジェクトでは、平成22年度から平成25年度までの4年間を一つの区切りとし、その期間中に、研究会や打ち合わせなどを通じて議論を重ね、研究成果を発表することを目指している。具体的に、言語類型論チームは、各言語における他動性に関する事柄の記述をまとめた論文集を、国内および海外の著名な出版社から刊行することを目指している。心理言語学チームと言語習得チームは、実験・調査などによる研究成果を適宜学術誌に投稿し、発表することを目指している。

2011年11月現在の研究実績の一部は以下の通りである。

- (1) 日本語に関して、国立国語研究所が開発したBCCWJコーパスを利用し、動詞の意味的・統語的な振る舞いをプロファイルするツールNINJAL-LWPを開発した。現在、動詞以外の品詞への拡張が進行中であり、近い将来一般公開する予定である。このコーパスブラウジングツールは辞書編纂のみならずコーパスに基づく日本語の研究、言語理論の検証などにも大いに役立つと期待される。
- (2) 言語類型論チームでは10言語における自動詞と他動詞の形態的な派生関係を明らかにする動詞一覧がまとめられた。類型論的な研究に必要な資料として、近い将来ネットで公開する予定である。
- (3) 本プロジェクトの心理言語学チームおよびプロジェクトリーダーが関わっている科学研究費（基盤研究（C）「アジア諸言語における他動性と非規範的構文に関する記述的・理論的・実証的研究」（課題番号21520400、代表：鄭聖汝））の共同研究では心理言語学的手法を用いて意図性の認知および自動詞・他動詞の使用の関係の解明を目指している。その成果の一部は以下の通りである。

(あ) 他動性と意図性の関係を解明するため、映像を用いて言語表現を引き出す実験的な手法により非意図的な出来事の捉え方および言語化に関する日本語とマラーティー語の対照研究を行った。本研究の成果の一部を日本語文法学会第11回大会で発表した（パルデシ・吉成2010）。また、この研究の類型論的な研究への示唆および日本語教育への提言をまとめた研究を2011年3月5～6日に米国サンフランシスコ州立大学で開催された第7回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ7）で発表した（パルデシ・吉成・鄭2011）。この研究では、言語間で自動詞・他動詞の使用が異なるとされている非意図的な出来事を取り上げ、非言語的な刺激（ビデオクリップ）を見せて言語表現を引き出すという心理言語学的手法を用いて先行研究の主張を検証する目的でパイロットスタディーを行った。その結果、(1) Alfonso (1971), 寺村 (1982), Ikegami (1982), Hinds (1986), Nishimura (1997) などの主張通り、日本語では非意図的な出来事を他動詞で描写することが可能であること、(2) Pardeshi (2002), パルデシ・堀江 (2005) の主張通り、マラーティー語に比べて日本語は、非意図的な出来事の描写における他動詞使用が許容される言語であることが明らかになった。本発表の内容をまとめた論文は *Journal of Japanese Linguistics* 28 に載る予定である（Pardeshi and Yoshinari, to appear）。

(い) 他動性と意図性の関係を解明するため、非意図的な出来事の言語化に関する質問紙を用いた言語調査を行った。特に日本語と韓国語に焦点を当てた対照研究の成果を、2011年10月22～23日にソウル大学で開催された第21回 Japanese/Korean Linguistic Conference で発表した。この研究では以下の二つの研究課題に焦点を当てた。(1) 非意図的な出来事の描写はその出来事を引き起こす原因に左右されるか、それとも言語によって左右されるのか。(2) 出来事の結果に対する回避可能性の認識が

他動詞の使用に影響を及ぼすのか。本実験は一つの刺激のみに基づくものなので断言できないが、実験の結果、(1)については、非意図的な出来事の描写はその出来事を引き起こす原因ではなく、言語によって左右されることが判明した。また(2)については、先行研究の主張と異なり、出来事の結果に対する回避可能性の認識より、原因の所在 (locus) によって自動詞・他動詞の使用が左右される可能性が高いことが明らかになった。本口頭発表の内容をまとめた論文は *Japanese/Korean Linguistics Volume 21* に載る予定である (Yoshinari, Pardeshi and Chung, to appear)。

今後も、それぞれのチームは、関連分野の学会でのパネルセッション、口頭発表などに積極的に応募し、国内外の学会で研究成果の公表をしていく予定である。また研究の過程で収集したデータを著作権などの処理を行った上で、可能な限りネット上で公開し、社会への還元を図る予定である。

参 照 文 献

- Alfonso, Anthony (1971) *Japanese language patterns: A structural approach 2*. Tokyo: Sophia University L. L. Center of Applied Linguistics.
- Hinds, John (1986) *Talking: An analysis of discourse*. Tokyo: Nan'un-do.
- Hopper, Paul and Sandra Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56: 251–299.
- Ikegami, Yoshihiko (1982) Indirect causation and 'deagentivization': The semantics of involvement in English and Japanese. *Proceedings of the Department of Foreign Languages and Literature, College of Arts and Science* 29(3): 95–112. Tokyo: University of Tokyo.
- Jacobsen, Wesley (1992) *The transitive structure of events in Japanese*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Lakoff, George (1977) Linguistic gestalts. In: A. Beach Woodford, Samuel E. Fox and Shulamith Philosoph (eds.), *Papers from the thirteenth regional meeting Chicago Linguistic Society*, 236–286. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Lakoff, George (1987) *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 西光義弘・プラシャント パルデシ (編) (2010) 『自動詞・他動詞の対照』東京：くろしお出版。
- Nishimura, Yoshiki (1997) Agentivity and causation in cognitive linguistics. In: Kei-ichi Yamanaka and Toshio Ohori (eds.) *The locus of meaning: Papers in honor of Yoshihiko Ikegami*, 277–292. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Pardeshi, Prashant (2002) "Responsible" Japanese vs. "intentional" Indic: A cognitive contrast of non-intentional events. *Japanese-Language Education around the Globe* 12: 123–144. Urawa: The Japan Foundation Japanese Language Institute.
- パルデシ, プラシャント・堀江薫 (2005) 「非意図的な出来事」の認知類型論：言語理論と言語教育の融合を目指して」南雅彦 (編) 『言語学と日本語教育 IV』111–123. 東京：くろしお出版。
- パルデシ, プラシャント・吉成祐子 (2010) 「他動性と意図性の相関関係」『日本語文法学会第 11 回大会発表予稿集』75–83.
- Pardeshi, Prashant and Yuko Yoshinari (to appear) An investigation into the interaction between intentionality and the use of transitive/intransitive expression: A contrastive study of Japanese and Marathi. *Journal of Japanese Linguistics* 28.
- パルデシ, プラシャント・吉成祐子・鄭聖汝 (2011) 「他動性と意図性に関わる言語表現使用の検証—日本語とマラーティー語の対照研究および日本語教育への応用—」. *Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ7) Conference Handbook*. 64–65.
- Rosch, Eleanor (1973) Natural categories. *Cognitive Psychology* 4: 328–350.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』東京：くろしお出版。
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』東京：くろしお出版。
- 角田太作 (2007) 「他動性の研究の概略」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨 (編) 『他動性の通言語的研究』

3-11. 東京：くろしお出版.

Wittgenstein, Ludwig (1953) *Philosophical investigations*. New York: Macmillan.

Yoshinari, Yuko, Prashant Pardeshi and Sung-Yeo Chung (to appear) Use of transitive verbs in the depiction of accidental events in Japanese and Korean: A psycho-linguistic study. *Japanese/Korean Linguistics* 21. Stanford: CSLI Publications & SLA.

プラシャント・パルデシ (Prashant PARDESHI)

国立国語研究所言語対照研究系教授。博士（学術）（神戸大学）。神戸大学人文学研究科講師，国立国語研究所言語対照研究系准教授を経て，2011年4月より現職。

主な著書・論文：『自動詞・他動詞の対照』（シリーズ言語対照＜外から見る日本語＞第4巻，共編著，くろしお出版，2010），The more in front, the later: The role of positional terms in time metaphors. (with Kazuko Shinohara, *Journal of Pragmatics* 43, 2011), Toward a geotypology of EAT-expressions in languages of Asia: Visualizing areal patterns through WALS. (『言語研究』130, 2006), 「非意図的な出来事」の認知類型論：言語理論と言語教育の融合を目指して（共著，『言語学と日本語教育 IV』，くろしお出版，2005）。

受賞：第1回「ことばと文化・教育」研究助成優秀賞（財団法人博報児童教育振興会，2007），The Chatterjee-Ramanujan Prize for Outstanding Student Contribution to The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2000 (*The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics*, Sage Publications)。

社会活動：日本語文法学会大会委員。

基幹型共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」

プロジェクトリーダー プラシャント・パルデシ (Prashant PARDESHI)

(国立国語研究所 言語対照研究系 教授)

プロジェクトの概要

述語構造の意味範疇に関わる重要な言語現象の一つは「他動性」である。パーニニによる伝統文法から現代文法にいたるまで，他動性という概念は言語の記述において中心的な位置をしめてきた。Lakoff (1977) や Hopper and Thompson (1980) の著名な研究以来，他動性は他動詞か否かの二極的というより連続的・段階的なものであるということが広く受け入れられてきている。言い換えれば，他動性とは全か無かというものではなく，度合い・程度の問題であるということになる。本プロジェクトの目標は言語類型論，心理言語学および第二言語習得研究の知見を統合し，意味的他動性が (i) 出来事の認識，(ii) その言語表現および (iii) 言語習得（日本語学習者による日本語の自動詞と他動詞の習得）にどのように反映されているのかを解明することである。日本語とアジアの諸言語を含む世界の約40言語を詳細に比較・検討し，それを通して，日本語などの個別言語の様相の解明だけでなく，言語の多様性と普遍性についての研究に貢献することを目指す。